静私幼だより

- 海外研修報告
- 特集/ごっこ遊び・劇あそびのすすめ（その4）長田安司
- 大人のごっこ遊び
- 園長等研修会
- コミュニティ（保育の窓）
- 子育てフェア（駿豆・清水）
- もの想い（愛鷹幼稚園・富塚幼稚園）
- 街ぶらり（掛川市・森町）
- 健康随想/栗山　恵
- 1年間のナイスショット特集

こどもがまんなかPROJECT
只今全国展開中

NO.179
2017③
Spring

平成28年度

海外研修報告

期間■平成28年8月27日(土)～9月13日(火)　18日間
場所■フィンランド共和国
　ポフヤンマー県ヴァーサ市

フィンランドの幼児教育制度及び教育事情がどのように展開されているのかを学ぶために研修生4名を派遣しました。研修生からの報告です。

山﨑弘樹　みなみ幼稚園
山竹幸未　認定こども園 ふじみ幼稚園
松下佳世　青葉幼稚園
武田真理子　聖隷クリストファー大学附属 クリストファーこども園

研修目的

学力世界一と言われるフィンランドは、早くから養護と教育の両面を併せ持つ形態で保育を行ってきている。今回の視察では養護と教育の内容やバランスについて現場はどのように捉え保育を展開させているのか、またフィンランドの特徴である豊かな自然・森での学びや、小学校への接続についても学びたいと思い研修に臨んだ。それらを通して学力に繋がる幼児期の学びや活動・生活について考察したい。

研修先

ピックカサラミ

サタマプイスト

スヴィラヒティ

ルミッキ・プナヒルッカ

1 少人数保育・落ち着いた環境

フィンランドの保育の一番の特徴は、少人数（横割り）で保育をしていることであった。生活や活動においても、少人数の空間になるよう（最大でも八人くらいまで）配慮・工夫がなされていた。例えば二十人のクラスでは、グループを三つに分けて活動し、保育者がそれぞれのグループにつくといった体制がとられ子どもたちの大きな声などは聞かれず、常に落ち着いた様子で活動や生活を送っている姿が見られた（保育者は、ティーチャー・ナース・アシスタントの一クラス三人が基本）。グループ担当制を行っている園もあるようだが、多くの園はチーム保育で、活動内容によって園児や担当者が変わっているようだった。

保育室はまるで家庭のような空間で、シャンデリア・カーテン・絵・家具などが上品に、また美しく置かれ、安心感のある保育環境が整えられていた。私達が研修した期間は、新年度が始まったばかりであったが、それらを感じさせないゆったりとした落ち着いた空気が流れていた。

場の保育者に少人数保育の利点と活動で大事にしていることをインタビューしてみた。

【子ども自身が安全と感じることができる・保育者とたくさん関わることができる・活動で子どもを待たせない・保育者が子ども一人ひとりをより深く理解することができる・静かな空間が作りやすく、活動に集中できたり、深めたりすることができる・保護者と連携がとりやすい・生活の力が身につくなど・・・】以上のことから、少人数で身につけた力は、将来大きな集団へ入っても役立つと考える。

2 主体性を重んじる保育

生活の様々な場所に絵と文字があり、子どもが主体的に生活を送ったり自らルールを守ったりすることができるよう、視覚的なサポートがある。例えば、朝食↓活動↓昼食↓午睡↓遊び↓帰宅といった生活の流れがカードで記されている。また、望ましい行動と望ましくない行動は、対比して分かりやすく○や×で示されている。

食事においては、五歳～六歳になると、配膳・食事・おかわり・片付けまで自分のことは自分で行う。どの子も上手にトングなどを使い手際よく配膳を行い、自分で食べる量を調整していた。また、水・牛乳・ケチャップなど自分の好みに合わせて準備し、好きな席に座って食べていた。四歳～五歳の子は、保育者に自分の食べることができる量を言葉で伝えてからお皿に取り分けてもらい、三歳でも、飲み物を取りに行くことや片付けなど、自分でできることは自分で行っていた。

遊びにおいては、コーナー遊びの環境が設定されており、どのコーナーで遊ぶか子ども自身が考え選択し、決定できるよう工夫されている。各コーナーの遊びに見合った人数（一人～四人）が計算されているため、玩具本来のおもしろさが十分に発揮され、また子どもたち自身も選んだ遊びに集中し、満足感を得ることができる。中には遊びを決めることができず長い間考え込む子もいるが、どの子もどこで遊ぼうか、何をしようか考えてから行動に移すため走り回る姿は見られない。日々の生活の中で様々な自己決定をしている子どもたちは、自分の生活や行動に自信を持ち、また責任を持とうとする力が育っていることを感じた。

3 言葉・コミュニケーションを大事にする保育

保育者は子ども一人ひとりとの会話にじっくりと時間をかけ、話そうとする気持ちを大切にしている。様々な場面で子どもに問いかけをし、また子どもからの問いかけに対しては全てを答えず思考する余地を残している。子どもが絵を描いた後自分の絵（活動）について保育者は一人の子どもに対して時間をかけて思いを聞く。聞いた内

容をその日のうちに記録し壁面として一緒に飾る様子が見られた。

話を聞く姿勢については、保育者や友達が話している最中に自分のペースで唐突に話しだす子どもがいると、保育者はストップをかけ待つことを徹底して伝えている。何かしてもらった時は、必ず「言葉」でお礼を言うように促している。また悪いことをした場面では言葉が話せる子は言葉で謝り、まだ話せない子はハグなどで表現できるよう、保育者が丁寧に関わっていた。

4 森で育つ力

緑が豊かなフィンランドでは、森での活動を大事にしている。様々な生命との出会いを通して、生き物の種類・色・匂い・味覚・変化など、自然界で起こる知識や感覚を身につけることができる。また、森での楽しい発見は、数・形・色・言葉・科学・歴史など、机上での学びをはるかに超える具体的な学びを促している。そして、存分に体を動かすことで、ボディイメージや体幹が鍛えられ、しなやかな身体の動きを身につけることができる。子どもたちは、五感をフルに使いながら想像力・創造力をかきたて、感じたことを言葉や絵画などで表現していた。また採取した自然物を使ってクッキングしたり、その素材から生活に必要なものを創り出したりしていた。

保育者が、「森では悪い天気の日はない」ということを言っていた。それは晴れていても、雨の日でも、雪の日でも、それぞれの楽しみ方があるということだ。晴れた日だけ森に行くのでは晴れている時の森の発見しかない。毎週同じ森に繰り返し行くことで、四季の変化を感じとり、実体験を通して、応用の利く学びの力を得ることができるのだと思う。

5 先駆的な取り組みと柔軟性

ルミッキ、サタマプイストでは、ICT（情報通信技術）を積極的に取り入れていた。保育者の事務作業の効率化・保護者との連携などに有効活用されていたが、今後は、子どもたちがiPadを使い、文字を覚えたり音楽を作ったりするなどゲーム感覚で様々なスキルを身につけることを目標としている。私たちがこの研修で学んだ『自然を愛し、森で充実した時間を過ごすフィンランドの保育』と、『デジタル導入への積極的な姿勢』と正反対の様にも見られた。これらのバランスをどのように考えているのかユッカ園長に尋ねてみた。すると「森にiPadを持って行けばいい。森で出会った様々な生き物について調べたり写真を撮ったり、絵も描くことだってできる」と、さらなる広がりについて応えてくれた。さらに「人間がテクノロジーを『道具』として使うのであり、コンピューターに使われることがないように。子どもたちが大きくなった時、必要なものは使えばいい。しかし知らないことが多いのは可能性を減らすこと。何の道具を使おうかと選ぶのはその本人である。依存するなどの問題に十分に注意を払いながら取り入れていきたい」と話してくれた。フィンランドには多様な人種と文化があり、人々は新しいことにもとても柔軟であると聞いていたが、まさにその通りだと思った。出会った園長先生たちの先駆的な試みと発想の柔軟さがとても魅力的であった。

【まとめ】

フィンランドの教育で、一番大切にされ守られていることは、保育の土台である『安心』であった。「安心できる環境」が継続して整えられていることで、子ども自身が自己を確立し、様々な可能性を持ちながら、自分らしく成長することができるような働きかけが丁寧に積み重ねられていた。

保育者は確かに手厚く人手が多い。日本との大きな違いである。しかし、子どもたちに対して決して言葉数や手助けが多すぎるわけではない。その子の必要度をよく見ているのである。結果、子どもたちが主体的に自分たちで生活や遊びを作り出していた。子どもにとって安心できる人数と空間・ねらいのある細やかな保育環境・大人の程よいサポートと距離感が子どもたちの自立と自律を助けているように感じた。

待つことが多ければ、待つ力が育つのではない。子どもの特徴を理解し、大人のやり方に従わせる子を育てるのではなく、子どもの特徴に合わせた関わりを持つことで、子どもたちの力を最大限に引き出すことができるのだと思った。フィンランドの保育者の姿からそれらの高い専門性を学ぶことが出来た。

大切なことは、子ども自身から沸き起こる「もっともっと」が生まれ、深めることができる環境があること、そしてそこに様々な良い相互の関わりがあることである。学ぼうとする意欲・喜びを味わった子どもたちは自ら能力を伸ばし、将来の豊かな『学力』へと繋がるのではないかと感じた。

おわりに

ユッカ園長が語ってくれた言葉は、これからの私達の歩みに大きな希望と方向性を与えてくれた。

「自分の仕事は何か。それは将来の大人を育てること。育った大人がまた次の世代に引き継いでいくために必要な能力は何か。それらが育たないと次の世代も育たない。世界は動き、社会は変わっていく。その中で何が必要なことなのか、我々は学び続けることが大事なのである。」

子どもが真ん中にいる保育、子どもの存在そのものを喜び、子どもの力を心から信じ、学び続けられる保育者であることが、私達にとってのこれからの大きな目標となった。

最後に、今回貴重な研修の機会を与えてくださった静岡県私立幼稚園振興協会、ヴァーサ市教育委員会ならびに各デイケアセンターなどのご尽力いただいたすべての方に感謝申しあげたい。

特集4

ごっこ遊び 劇あそびのすすめ

認知・非認知スキルを高める 教育活動としての「ごっこ遊び・劇あそび」

社会福祉法人同志舎
共励保育園理事長

和光大学心理教育学科
非常勤講師

長田 安司

長時間保育をはじめとする労働対策中心の保育施策が日本の活力を失っていく構図「保育園のパラドックス（逆説）」を新聞紙上で発表。2013年「便利な保育園が奪う本当はもっと大切なもの」を上梓。誤った国の保育施策を厳しく指摘した。
2013年BSフジ・プライムニュース「待機児童ゼロへ急改善　市長が語る横浜方式」に出演。「待機児童を解消したところで、問題が解決されるのか？」と疑問を呈し、子供の視点からの発言で話題となる。
毎年2月に開催される保育展では、遊びを通して学ぶ「総合保育」を公開。0歳から5歳までの連続した子供の発達を保障する保育実践は保育関係者に高い評価を得ている。

3歳児の「ごっこ遊び」の位置（特徴）

0歳児・1歳児・2歳児のごっこ遊びは、子供たちと保育士がごっこ遊びを楽しんでいる様子を、親は衝立の陰に隠れて節穴から覗き見するごっこ遊びです。4歳児・5歳児は、ホールの舞台の上で活動する劇あそびに発展していきます。子供たちは舞台の上で劇あそびを楽しんでいくと同時に、観客を意識して活動する要素が加わります。

0・1・2歳児のごっこ遊びと4・5歳児の劇あそびの中間に位置するのが3歳児のごっこ遊びです。

3歳児のごっこ遊びには、もう衝立はありません。図のように2つの保育室（各室約70㎡）の壁を取り払い、活動に十分な広さを確保し、その3分の1を客席、残りが舞台（活動の場所）という設定にします。子供たちは親が見ている前でごっこ遊びを展開します。

3歳ごっこ遊び　舞台・客席図

1クラスを3つのグループに分けます。3つのグループに分けることで、一人ひとりの子の活動に関わる密度を高めることができます。1つのグループが物語として活動している間、残りの2グループは舞台の上手に用意された椅子に座って活動を観ることになります。第1のグループの活動が終わって、第2のグループが活動する番になると、第1のグループは椅子に座って第2グループの活動を観ます。

この方法によって、子供たちは大勢の大人の観客の前で活動（表現）するという体験と、物語を観ながら一体的に参加する楽しみを同時に得ることができます。この方法は、終始物語に演技者と観客として参加できるので、出番が来るまで舞台の袖裏でただ待つという必要がなくなります。椅子に座って他のグループの活動を観る力も育つので発達に合った良い方法だと思います。

黒い玉が消えないおばけちゃんを助けよう！（3歳児のごっこ遊び）

運動会が終わった後の2ヶ月間、継続して繰り返されるごっこ遊びです。

運動会後、おばけちゃん（人形）の体に発疹のように付いていた橙と緑と黒の斑点は、新鮮な野菜を食べたおかげで橙と緑の斑点は消えたものの、黒い斑点は消えずに残ってしまいます。

子供たちは、この斑点を治すためには、どうしたらよいかを保育園中の保育士に聞き歩きます。そして、「パパおばけに聞いてみたら?」と、ある保育士から教えてもらいます。そこで、パパおばけに手紙を出すことになりました。

黒い斑点が残ってしまったおばけちゃんは、その斑点のせいで次のような困った行動を起こしてしまいます。

①返事をしない。

朝の会で、おばけちゃんは名前を呼ぶと上手に「はい！」と返事をしていたが、全くしなくなってしまう。

②ずるをする。

手を洗う時や給食のおかわりをする時などに並んでいると、割り込みのずるをする。おもちゃや絵本のお片付けをしない。

③うそをつく。

パジャマに着替えている際、だれかのパジャマを隠して、それを観ていた子供たちが「おばけちゃんがかくしたよ！」と言うが、「ぼく、やってないもん」などとうそをつく。

そんな困った行動を繰り返しているオバケちゃんの体には、更に大きくなった●、▲、■の斑点が現れ、子供たちはびっくりします。

子供たちからは、「ごまを食べないから」・「ナスを食べないから」・「バイキンのせいだよ」などと、いろいろな意見がでます。どうしたら治るのかと思っているところへ、パパおばけから手紙とパパおばけの家までの地図が届きました。

手紙には、おばけの国には、●の斑点の「返事をしないしない病」、▲の斑点の「ずるずる病」、■の斑点の「うそつき病」が流行っていて、おばけちゃんもその病気にかかったかもしれないことが書いてあります。

その3つの病気を治すには、赤い紙と青い紙と黄色の紙に書いてある「おまじない」の言葉が必要だが、その紙がなくなってしまったことを伝えてくれました。

そこで、子供たちは、おばけちゃんの黒い斑点を治してあげるために、「おまじない」の紙を探しに出かけます。ここまでが2ヶ月かけて日常の保育の中で行われる「ごっこ遊び」です。

おまじない探しの旅は、以下のようなストーリーで展開され、いろいろな成功体験や失敗体験を経て、12月の中旬のお父さん・お母さんに観てもらう日のごっこ遊びへと向かいます。親が参加するのはその日だけです。

親参加の「ごっこ遊び」当日

子供たちが、おまじないの紙を探しに出かけると、途中の「不思議の森」でいろいろな登場人物に出会います。

①意地悪をする「とおせんぼの木」とバランス対決・まねっこ対決をして、赤の紙のおまじないを手に入れる。（赤グループ）

②お相撲大好きなクマどんとお相撲対決・お箸を使った栗拾い対決をして、青い紙のおまじないを手に入れる。（青グループ）

③嘘つきの狐が、キツツキのレストランの看板を書き換えて、自分のレストランにしてしまう。子供たちはキツツキと協力して狐の嘘を暴き、レストランを元に戻してあげ、お礼に黄色の紙のおまじないを手に入れる。（黄色グループ）

子供たちは、手に入れた3つのおまじないの紙を持ってパパおばけの家に向かいます。途中に大きな川があり、観客のママたちがボートに変身して子供たちを背中に乗せて川を渡ってあげていると、ワニがでてきて子供たちを食べようとしますが、ママ達が隠してくれます。

パパおばけの家に着き、長い長い合い言葉を唱えるとパパおばけの門が開き、中からパパおばけが登場し、パパおばけの指示に従って子供たちが持ってきたおまじないの紙をくっつけて唱えると、見事！オバケちゃんの●、■、▲の黒い斑点は消えてしまいます。

子供たちは大喜び！そして、帰りにはママ達がバス代わりになって、オンブして園まで帰るというごっこ遊びです。

ごっこ遊びの全体像をお伝えするだけで紙面が尽きてしまいました。次回は、このごっこ遊びを子供たちがどのように楽しんだか、その遊びを通してどのような発達が得られたか、エピソードを含めてお伝えします。

大人のごっこ遊び

富士宮・上野幼稚園
吉野　友勝

子どもはごっこ遊びが好きです。絵を描いたり、おもちゃで遊んでいるときも、自分なりに物語をつくっています。ブロックをつなぎ合わせているときに通りかかると、「園長先生、見て見て」「上手だね。何作ってるの」「あのね××だよ。こっちは○○」大人の目にはよくわからないものも、子どもは様々に想像をし物語ができています。絵も同じです。絵を見せて色々なお話をしてくれます。年少の初め頃は一人遊び、次第に周囲の友だちを交えたものに発展していきます。子どもは、しがらみのない自由な発想をする脚本家であり、舞台監督だと思う。

筆者は元中学校教師です。荒れた地元の学校を立て直す過程で、教師と父母で文化祭に劇をやりました。これが大うけで翌年から生徒も参加するようになり、年を追う毎に参加者が増え、幼稚園児・小中学生・高校生や地域の人に広がり、学校文化祭と地域公民館祭の2回公演が恒例となって二十三年経ちました。

素人演劇は、様々な職業・年齢の人が集まり小さな社会になります。そこに役者・道具・照明・音響・衣装・美術等たくさんの役が生まれます。それらが一体化した時によい作品になり、感動を生み、自分たちも成就感とともに感動します。だからどの人も脚本を何回も読み、情景や登場人物の気持ちを考えたり、役者を引き立てる場に最適な音響・照明・道具を考え、あれこれ試行錯誤しながら練習します。その中で子ども達は、挨拶・礼儀・各係の連携・登場人物の思いや性格・他人の立場になって考えたりすることを行動しながら学びます。大人は日常生活にない体験をし新たな自分を演じます。

人間の脳は、中心部に旧(古)皮質という呼吸や心臓など意識しなくとも活動する分野を司る脳細胞があります。動物はみんな持っています。人間はそれを包み込むように新皮質という高度な活動を司る脳細胞を持っています。耳の辺りの左右には側頭葉(そくとうよう)という主に記憶を司る細胞があり、おでこの辺りには人間だけが持つ前頭葉(ぜんとうよう)という言語・計算・思考や感情・想像・倫理道徳等、他の動物にない高度な活動を司ります。ごっこ遊びをしているとき、これらの脳細胞は盛んに活動します。折り紙・紙芝居・読み聞かせ・お絵描き・遊戯・ハサミや糊を使うときも同様です。手間ひまかけたこういう積み重ねが知性や知能を育てます。脳科学者が指摘するところです。

テレビ・スマホ・ゲームは考えたり想像する間もなく一方的に音声と映像を与えるだけです。人間を人間たらしめている分野は活動していません。

ドラマ・映画・演劇をつくったり、その中で演じたり、自分を重ねて観賞したりすることは、大人のごっこ遊びかなと思う。ごっこ遊びは他の動物にない脳を持つ人間の本質的な部分かもしれません。

園長等研修会報告

奈須正裕先生

上智大学
総合人間科学部教授

宮下友美恵先生

全日本私立幼稚園
幼児教育研究機構
研究研修委員長

平成28年11月29日に、園長等研修会が開催されました。

保育の質の向上を目指してというテーマで、宮下友美恵先生（全日本私立幼稚園幼児教育研究機構研究研修委員長）より全日本私立幼稚園幼児教育研究機構の最新の取り組み状況の紹介がありました。機構の組織説明や取り組みの内容と現状の活動の紹介がされ、様々な研修が有機的に関わり合いながらより成果が出るように、それぞれの園が園内・園外どちらの研修とも大事にしていかなければならない旨のお話がありました。

質の高い幼児教育が行われるためには、保育者が育みたい資質・能力、非認知能力の重要性をしっかりと認識することや、遊びの中から幼児の育ちを的確に捉えて、環境構成や援助をしていくことが重要であるとのことでした。研究機構の最新の取り組みとして、現在も研究が行われている〝砂場研究〟の事例がこの研修会で紹介されました。

また、毎年行われている幼児教育実践学会の紹介があり、東海北陸大会同様全国の私立幼稚園の先生方が保育について活発に意見交換する様子が紹介されました。

最後に、これからの幼児教育の質の評価の促進というお話の中で、公開保育を活用した保育の質の向上の取り組みが詳しく紹介され、公開保育コーディネーターがどう公開保育実施園に寄り添いながら支援していくかを、公開保育前の準備段階からその後の振り返りに至るまで順を追っての説明がありました。

〝研修は私立幼稚園の鑑である〟と宮下先生がおっしゃっていたように、こうした研修の機会を通じて、私たち教職員が日々の保育を考え、振り返り、そして改善していかなければならないと考えます。

すべては子供たちの幸せのために、園長先生のリーダーシップのもと教職員全員で保育の質を考えていくことが重要です。

続いて講義していただいたのは、奈須正裕先生（上智大学総合人間科学部教授）でした。「幼小中の連携・接続と今後に求められる保育の質」というテーマで、今後の学習指導要領改訂で私たちは何を重視して幼児教育をしていけばよいのかという内容のお話がありました。

これからの時代に必要となってくる学力として、〝どのような問題解決を現に成し遂げるか〟いわゆる〝コンピテシー・ベイスの学力〟の説明がありました。これからの時代、こういった学力がより重要になってくるということです。これは、子ども達がよりよく生きていくために、持っている知識をどう使って何をしていくかという資質や能力を私たちがどう育成していくのかが、幼児教育の中でこれまで以上に重要視されるということです。そして、なぜこのような資質や能力が必要なのかを、現状の子どもたちの学力をふまえ、社会構造の変化やこれからの社会の変化を予測しながら説明してくださいました。思考・判断、発想・構想、他者との協働、自己調整の能力がすべての人に求められる時代になる。知識だけが学力ではない。私が私の生き方をしっかりと決めることができる力もとても重要になってくるのだとお話されました。さらに、これから改訂される学習指導要領でもこういった学力観が大切になってくるということを、例をあげて説明してくださいました。

幼児教育が中心的に育ててきたものは〝コンピテシー・ベイス学力〟です。小学校以降の教科か学力についても〝コンピテシー・ベイス学力〟という視点から指導要領の見直しが進行中とのことです。もちろん、小学校以降の教科における〝知識・技能〟（コンテンツ・ベイス学力）との調和的な育成がされなければなりません。子ども達が小学校で受ける授業の形も変わってきていると、算数の授業例にお話してくださいました。

小学校との接続、今回の教育指導要領改訂でどんなことが重要視されるのか、先生のお話で何を求められてくるのかを大変わかりやすく聞くことができました。

幼稚園教諭になって

認定こども園曙幼稚園　金指 朋加

私が保育園に通っていた時に大好きだった先生への憧れと、保育士をしている母親の影響もあり幼い頃から子どもと関わる仕事をしたいと思っていました。大学では保育の資格を取得できる学部を専攻し、その夢を叶えることができました。幼稚園教諭となり、10ヶ月が経ちました。私は2歳児30人クラスを先輩方と見ています。

入園式の日、自分のクラスの子ども達と保護者に対面した時、「今日から社会人、そして、この子たちの担任なんだ。」と期待と不安でいっぱいだったことを今でも鮮明に覚えています。4月当初、親元を離れ慣れない環境から大泣きする子、給食の野菜が嫌いで顔を背ける子、玩具の貸し借りが上手にできずにトラブルになってしまう子と、どのように関わっていったらよいか右も左も分からず毎日毎日苦戦し、幼稚園教諭になったのにもかかわらず子どもと関わることに苦手意識もありました。

しかし、私が困ったり悩んでいるとその度に先輩の先生が、「こうしたらいいよ。」とアドバイスをして下さり、実践を重ねていくうちに少しずつ子どもの対応や声かけの仕方がわかるようになってきました。それでも一筋縄ではいかないことも沢山あります。心が折れそうになることは何度もありましたが、先輩の先生が、「失敗して成長するんだよ。」とアドバイスをして下さったことが印象的で、今では失敗を恐れず沢山の子どもと関わり、色々な挑戦をしていこうと思えるようになりました。失敗してしまったらその反省を次へと繋げていけるよう日々努力し、乗り越えて行けるよう頑張っていきたいと思います。

幼稚園教諭となりまだ10ヶ月程度ですが、幼稚園教諭であることに誇りを持っています。これからも成長できるよう日々、勉強していきたいと思います。

幼稚園教諭になって

静岡平和幼稚園　渡辺 紗帆

子どものころからの夢だった幼稚園教諭になり、あっという間に10ヶ月が経ちました。私は主任の先生と一緒に12人の年少児クラスを担当しています。担任を受け持つことが出来、ずっと憧れていた幼稚園の先生になれたという実感が沸きましたが、私がクラスを受け持っても大丈夫だろうかという不安な気持ちで一杯でした。そんな気持ちを抱えながらもこれまでの日々が本当に早く、気付いたら1月になっていました。

自分のことで精一杯な10ヶ月でしたが、少しずつ子ども一人ひとりとコミュニケーションをとり、クラス全体を見る余裕が出来てきました。それは、自分自身が成長したからではなく、子ども達がとても成長したからだと感じています。

1学期の頃の子ども達は、話している最中でも保育室から飛び出して廊下を走り回ったり、身仕度や片付けが出来なかったりと、思い通りにいかないことばかりでした。子どもがいけないのではなく、私が子どもの注目を集める言葉掛けや環境を作ることが出来ていなかったのだと反省し、先輩の先生方の関わり方を見て学び真似をしました。

製作では導入が難しく、表現や言葉選びに苦労していますが、今では子ども達の理解がとても早くなったので、なんとか行うことが出来ているように思います。「せんせいおてつだいするよ！」「もうせんせいったらおっちょこちょいなんだから」と、子ども達の笑顔や優しい言葉に助けられ、日々成長している子ども達はすごいと実感しています。その子ども達の姿を見て、私も日々学び考えて成長していきたいと思っています。

毎日の生活の中で子ども達の元気な姿や笑顔がたくさん見られるよう、私も全力で保育を楽しみ、笑顔でいることを心掛けていきます。これまでの失敗や課題を活かし、先生方の子ども達への関わり方を見て学びながら実践し、子ども達が幼稚園をもっと好きになるように努力していきたいと思います。

一人前の教諭とは…

若竹幼稚園　秋山 友美

私が幼稚園教諭になって、気がつけば20年近く経とうとしています。今では、教え子と一緒に仕事をするようになりました。若い先生達の姿を見ていると、まだ新人の頃に前園長先生がよくおっしゃっていた「幼稚園の先生は年少組を担任して一人前」という言葉を思い出しました。当時の私は、一度も年少を受け持つ機会がなく、「まだまだ半人前なんだなあ」と思う反面、どういう事なのかわからないままその言葉だけが心に残っていました。それから十数年、結局年少組を担任することなく過ごしてきました。もうこのまま、年少組はやることはないと思っていた3年前のクラス発表。衝撃が走りました。まさかの年少組の担任の欄に自分の名前があったのです。「私に出来るのか・・・」不安しかないまま入園式を迎えました。ベテラン面をしつつも気分は新人で、あたふたしながら毎日を過ごしていましたが、ふとあの言葉を思い出しました。「年少組を担任して一人前」初めて幼稚園で出会う先生が自分で、今まで出来なかったことが出来る場に立ち会い、心から頼りにしてくれている子ども達に、自分が出来ることは何だろうと考え保育していく中で、自分に足りなかった物に気付く事が出来ました。大きい組を担任していると、出来て当たり前と思っていた事が当たり前ではなく、一日一日、一生懸命生きている子ども達の大切な日々を大事にしていこうと改めて思いました。

今年も年少組の担任になり、3年連続で年少さんと過ごしています。元気いっぱいで、個性が強い子が多く、行事があるたび無事に乗り越えられるか心配をしましたが、いつも笑顔で楽しんでくれる子ども達に助けられています。「こんなに小さいのに、○○が出来た！」と感動させられることが多くなりました。年少組を担任して本当によかったと思います。これで私も一人前になれたかと思いましたが、昨年から私の園はこども園になり、まだ接した事のない乳児さんも入園してきました。まだまだ私は半人前。一人前になれるよう今後も頑張りたいと思います。

先生と呼ばれるようになって

しらゆりこども園　耳塚 阿希子

「先生」と呼ばれるようになって、あっという間に13年が過ぎようとしています。

当初は憧れの幼稚園の先生になり期待に胸が膨らんでいた反面、子どもたちと楽しく遊べるかな？保護者と上手くかかわれるかな？等たくさんの不安でいっぱいでした。子どもたちの元気や笑顔にとっても元気になれたことを鮮明に覚えています。しかし、覚えることがたくさんあったり、先輩方のように上手く保育ができなかったりして焦ることもしばしばありました。先輩方に「分からないことを聞こう」と思っても、何もかもが初めてで焦れば焦る程「分からないこと」が「分からない」と思ってしまいました。自分が焦ると、子どもたちも慌てたり、落ち着きがなくなり不安な表情になってしまう子が増えてしまいました。その時、先輩方が丁寧に助言してくれたり、考える時間をくれました。そのおかげで「落ち着いて周りを見よう」と思えるようになりました。気持ちに余裕をもつようにすると、子どもたちにも不安な表情や慌てる姿が無くなっていきました。私のせいで子どもたちにあんな表情をさせてしまったと反省しました。「あの時の気持ちを忘れてはダメだ!!」と保育者を続けてきました。

13年目になりますが、失敗して落ち込む事も多くあります。しかし、子どもたちが「先生」と素敵な笑顔で呼んでくれることでパワーをもらい、頑張ろうと思います。入出しらゆり幼稚園からしらゆりこども園（幼保連携型）になって4年目。今年度は、初めての乳児・1歳児の担任をさせていただいています。月齢によりまだ言葉もはっきりしてない子も多いですが、「せんせい」と覚えて笑顔で呼んでくれることがとても嬉しいです。子どもにたくさんの喜びを与えてもらっていると感じ、こんなに幸せな職業は他にはないと思っています。

保育者になり年数を重ねていますが、まだまだ課題や超えなければならないハードルもたくさんありますが、しっかりと向き合い、毎日大きな成長を見せてくれる子どもたちの力を借り、私も更に成長していきたいと思います。

子育てフェア in 駿豆

初冬の少し冷たさを感じる11月23日に三島市民文化会館に於いて、私立幼稚園子育てフェアin駿豆 いきいき親子音楽会、子育て相談会が開催され、約400人もの親子の参加がありました。

数々の賞に輝いた創作和太鼓集団〝打鼓音〟が、真紅と黒のコスチュームに身を包み、大小さまざまな大きさの太鼓を響かせながら、巧みなパフォーマンスをみせてくれました。更に、チャパ（小さなシンバルのようなもの）と言う打楽器はお祭りのお囃子を思わせるにぎやかな音。またリズムのかわいらしさも太鼓に負けない表現で、子どもたちは表情をキラキラ輝やかせていました。

太鼓の音はお母さんの心音に近いものがあるそうで、人の心に懐かしく響くのだそうです。また太鼓の演奏には様々な願いが込められており、彼らは東日本大震災のあとにも東北の地で震災の復興を願う演奏を行いました。この日の演奏は子どもたちの健やかな成長を願っての演奏でした。

約一時間半の演奏でしたが、会場は演奏者と観客が一体となり、時には静寂に包まれ、時には手拍子や拍手で盛り上がり時間を忘れてしまうほどの感動でした。

終演後もしばらく荘厳な日本太鼓の余韻が残る素晴らしい一時でした。

子育てフェア in 清水

さる1月7日（土）清水区の三保灯台前海岸において、私立幼稚園子育てフェアin SEIAN 清水新春親子凧揚げ大会＆子育て相談会が開催されました。親子558名もの参加を得た大会は今回でなんと21回目になります。本部には〝子育て相談室〟も設けられ、子育てアドバイザーの小田切昭子先生が、保護者からの相談に真摯に耳を傾けてくださいました。壊れた凧を直す〝凧病院〟には、日本凧の会の内田先生と千葉先生が常駐してくださり、困った時の対応も万全です。

これに先駆けて昨年の11月26日（土）県立清水特別支援学校の体育館で、「駿河凧を作る講習会」が開かれ、95組の親子が伝統的な凧作りに挑戦しました。静岡には戦国大名、今川義元の家臣が戦勝の祝いとして揚げた凧が、駿河凧として今に至るまで伝わっています。当日は講師の指導のもと、各親子が一生懸命に凧作りに取り組んでいました。できあがった凧にはそれぞれオリジナルの絵が描かれていて、色とりどり華やかなものが会場に所狭しと並びました。共同作業での制作により、親子の絆もより深まったように思います。

凧揚げの当日は快晴でしたが残念ながら風が弱く、保護者も子どもも時折吹いてくる風をつかまえようと、必死に砂浜を走り回っていました。「もう走れないよー」というお父さんの声があちこちから聞こえた程です。あとほんの少し風があれば、より多くの凧が大空高く舞い上がったことと思います。それでもどの親子の顔にも笑顔が見られ、皆まぶしそうに空に浮かぶ凧と、澄んだ青空を見上げていたのが印象的でした。

凧揚げは正月の伝統的な遊びというだけでなく、親子で一緒に楽しめる遊びでもあります。子どもの情操教育にはぴったりのものですので、これからも末永く受け継がれていってもらいたいと思います。

子供の笑顔

愛鷹幼稚園ＰＴＡ会長
植松　都

「子供たちにパワーをもらったよ。笑顔がキラキラしていて、とても楽しかった。子供たちの純真さに感動した！」

幼稚園のクリスマス会にサプライズのサンタクロース役で参加した時の夫の言葉です。

我が家では三代にわたりご近所の幼稚園にお世話になってます。夫の父、夫、そして三人の子供たち。そんなご縁もあって今年度のＰＴＡ会長を仰せつかり、夫婦で貴重な体験をさせていただいています。

幼稚園では、年間を通して色々な行事があります。参観日・運動会・遠足・発表会・お泊り保育などに裏方（役員）として参加する機会もありました。

様々な行事を通じ、日々の家庭生活では子供と距離が近い分、なかなか気づくことのできない面の成長も感じ取ることができました。真剣な眼差しで先生の話を聞いている場面やお友達に対して何気なく相手を思いやるしぐさをしていた場面で感心させられたり、運動会ではいつの間にか速く走れるようになっている場面に遭遇し驚かされたりもしました。そして何より、わが子だけでなく幼稚園の子供たちみんなの素敵な笑顔を見ていると、何とも言えない幸せな気分になります。

また、行事に裏方として参加し感じたことは、先生方のご指導とお力添えが園での子供たちの笑顔をよりキラキラさせてくれているということです。子供たちがワクワク楽しくなる参観日や運動会のプログラム内容、みんなが発表会での役になりきれるようにテンションが上がる手作りの可愛らしい衣装、各種イベントでのサプライズ演出の準備など、先生方の子供たちへの愛情を感じ、多大なお力添えに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

子供たちには、幼稚園で育んだキラキラした笑顔に純真な心を忘れず成長し、これからの人生の中でも関わっていく人たちを幸せな気分にしてほしいと願っています。

家庭の中でも笑顔を大切にして、子供たちに安心感と希望を与えられるように、家族仲良く暮らしていきたいと思います。

認めることの大切さを痛感

富塚幼稚園ＰＴＡ会長
西川　佳子

我が家には、小学四年生・二年生・年長の三人娘がおります。毎日それはそれは賑やかな（うるさいともいいますが…）日々を送っております。

先日、長女が『自分のいいところを家族に書いてもらう』という宿題を持ち帰ってきました。

「私のいいところって書いてもらえる？」と、恥ずかしそうにプリントを見せるお姉ちゃんの姿をみて、俄然張り切って下書きを始めたのが、下二人の妹たち。

私が、う～んと悩みながら数枚記入したところでふと横に目をやると、妹たちはそれぞれ何十個もお姉ちゃんのいいところを記入しているではありませんか！

『わたしをやさしくおんぶしてくれるところ』『いっしょにあそんでくれるところ』『けんかをしてもゆるしてくれるところ』『おこっていてもピアノをおしえてくれるところ』等々、特に三女にいたっては、自分に都合のよいところを書いているようにも思いましたが、一つひとつ読み進めるたび、私がいつも怒って注意しているところが、妹たちにとってはお姉ちゃんのいいところなのだ・・・と気が付きました。

「そっか・早くしなさい、そんなのじゃダメ、そんなことで喧嘩しないで」と、いつも口うるさく伝えていたけれど、子ども達は全て一生懸命やっていて、ただそれを私が認めていなかっただけなのだと。

そのプリントを書き上げた時、「いいところがたくさんだ！」と、長女を始め三人の顔がキラキラ輝いていたことが大変心に残り、私自身が子ども達への声かけを見直すきっかけにもなりました。マイナスを指摘するのではなく、やってくれたことを言葉で認めるだけで、日々子ども達の笑顔が増えていることを実感します。特に三女は毎日私のいいところを探して、覚えたてのひらがなで嬉しい手紙を届けてくれるようにもなりました。

言葉ひとつで相手を傷つけることもあれば、自信をつけることもできます。だからこそ私自身が穏やかな言葉を使って大きく子ども達を見守っていけるよう、これからも成長していきたいと思っております。

街ぶらり 掛川市&森町スポットぶらり

第11回「街ぶらり」は、掛川市、森町のおすすめスポットを紹介します。

◆22世紀の丘公園

この公園は、来世紀にむけて100年かけて美しい樹林の公園を楽しみながらつくり、つくりながら楽しむという意味が込められ10年ほど前に掛川市満水（たまり）に作られた総合公園です。

まずなんといっても目を引くのは、公園の奥に構える大型複合遊具です。全長50m以上はあろうかというその大きさは、子どもだけではなく大人も目を輝かせてしまうものです。31もの遊びができる遊具で、休日ともなれば多くの子ども達で溢れています。他にも幼児向けの遊具や、広々とした芝生広場があり様々な遊びが楽しめます。

また、併設されている屋内施設「たまり～な」というコミュニティセンター内には、温水プールや多目的ホール・大小の研修室などがあります。温浴施設は園児が無料で使用でき、近年は掛川市内の幼稚園などを中心にお泊り保育の際に活用されることも増えているそうです。

駐車場も広く、国一バイパス千羽ICからも5分と近く遠足には最適の公園です。

◆森町体験の里　アクティ森

遠州の小京都・森町にあるこの施設は、創作体験工房やアウトドア体験フィールド・レストランなどを備えた複合体験施設です。新東名高速道路の開通により、車での便も非常に良くなりました。当日は園内の蝋梅の花がとても綺麗に咲いていました。

この日は数ある体験の中から、紙漉きを体験し、和紙の葉書づくりをしました。葉書8枚が同時に作れる木枠を使い、紙漉きをし、その後押し花や染料で色付けし、参加した広報委員それぞれが個性あふれる葉書を作ることができました。一時間程の乾燥時間が必要ですが当日完成した葉書を持ち帰ることができます。他にも、陶芸や草木染・遠州鬼瓦づくりなどの体験が楽しめます。

昼食は施設内にあるレストラン「かわせみ」にて、この時期ならではの森町産自然薯を使ったとろろ汁の定食をいただきました。とろろ汁の中にはスライスされた椎茸も入っており、自然薯特有の強い粘り・香りの中に椎茸の風味が加わりとてもおいしい一品でした。施設の方のご厚意でお刺身をサービスしていただき、山かけも味わうことができました。また、太田川ダムカレーというメニューも人気で、ダムに見立てたカレーをスコップ型のスプーンで決壊させて食べるという興味深いカレーです。

屋外の300人収容のBBQ広場では手ぶらでBBQが楽しめ、すぐ横の川で水遊びもできます。今回は冬でしたが、また違った季節に訪れてみたいです。

◆掛川城

掛川城周辺は掛川城公園として整備されており、掛川城天守閣・大名の暮らしを偲ばせる城郭御殿である掛川城御殿や二の丸美術館・三の丸広場が併設されています。

かつて天守閣のその美しさから東海の名城と謳われた掛川城。現在は天守閣が日本で初めて木造で再建されその姿を現しています。大手門をくぐり見上げる天守閣は、その迫力に圧倒されるものがありました。中に入り、昔の造りが再現された急な階段を登ると4階の望楼部からは掛川の城下町が一望できます。

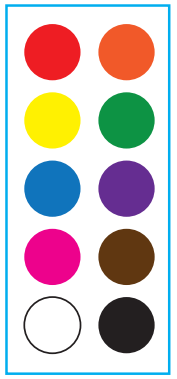
また、今回は平成27年6月、二の丸美術館の隣に新たにオープンした掛川市ステンドグラス美術館も見学しました。全国でも珍しい公立のステンドグラス専門の美術館で、館内に展示されているステンドグラスと建物は掛川市内在住の開業医の方が寄贈したものだそうです。私達が美術館を訪れたのは夕方で、館内奥にあるホールのステンドグラスは西日を浴びてとても綺麗に輝き、ベンチに座って眺めていると立ち去るのが惜しいくらいに素晴らしい光景でした。

みなさんのおすすめの場所やお店があったら広報委員までお知らせください

健康随想 5 心の診断

色彩から学ぶ（その5）

NPO法人 色彩心理診断士協会 COMPAS 代表理事
一級建築士 **栗山　恵**



Q1　10色の中から気になる色を1色選んでください。答（　　）

Q2　白と黒の2色のうち気になる色はどちらですか？答（　　）

毎回2色ずつその色の持つ心理的側面を解説しています。10色の色が出そろった時、選んだ色をメモしておくことで貴方の心が変化している事を実感していただけると思います。

■カラーさぷりの取り組み

昨年11月に県民推進運動の補助金をいただき色彩心理「カラーさぷり」の活動を磐田市、浜松市を中心に開催しました。4回の子育て相談会を開催し120名を超える方からの応募をいただけたことにスタッフや関係者一同驚くと同時に必要性を強く感じました。この活動は子どもから老人また外国の方にも対応でき、3枚の塗り絵から塗ってくださった方の今の心の状態を確認して、心に寄り添う活動です。うまく言葉にできない気持ちを言語化し自己肯定感や安心感を得て、困っていることがあれば繋がる先をご紹介するお手伝いをしています。体験者に「安心したことは何ですか?」とお尋ねしたところ、

■カラーの心理以外にも子育ての話ができる場所としても体験してよかった。今のままで大丈夫と安心させていただきました。将来についてもアドバイスいただけて子育てについて少し自信を持って将来に向かえそうです。

■目に見えるし、説得がありました。娘が自分で判断してやっていくだろうといわれたことと自分の○○（秘密です）がみえたことです。

■子どもや自分の心理状態がわかり方向性がみえた気がした。

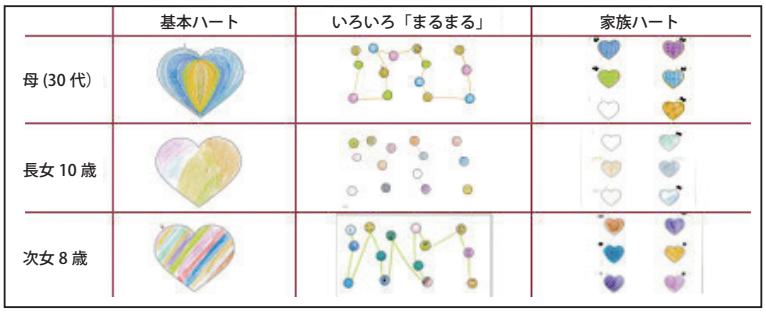
などとご紹介しきれないくらい多くのお声を頂戴しました。

■実際のカラーさぷり

実際に塗っていただいた用紙をご紹介します。3人で参加してくださったCさん家族のカラーさぷりです。この用紙から下記のようなことが分かります。（ご本人様からご了承は頂いていますが個人情報保護の関係上、詳しい情報やご本人から頂いた内容については省かせていただきます）

■Aちゃん（次女）

とてもしっかり者。現在言いたいことが言えなくて軽いフラストレーション状態を表現しています。様々なものに関心を示すことが多く、その一つ一つから多くの知識や感じる心を育んでいる様子が表現されています。協調性があり周りを思いやることができる、仲間を信じる心を持っていることを表現しています。少し一本気で意思が強いところもあるので順番を守らない人、自分のイメージ通りにいかないことがあると頑固な一面が顔を出す可能性があります。姉のBちゃんよりも強い意志を持っています。



■Bちゃん（長女）

優しく穏やかな心の状態を表現しています。お友達とどのようにコミュニケーションをとって良いか考えてしまうことが起きているかもしれません。うまく関係を創っていきたいと思っていますが、自分自身に自信が持てない状態が考えられます。

■お母さん

とても理性的で心が豊かな状態を表現しています。変化の時期に来ているようで何か新しいことを始めたい、自分を認めてもらいたいという気持ちが表現されています。大切にしている事、新しく始めたい事に対する情熱はしっかりと芽生えているのにあれこれ考えすぎている可能性が大です。まずは感じることを大切にし、素直にやってみることから始めると打開できる方法が見つかると思われます。対人面ではサブリーダーとして周りをサポートしつつ、目標に向けて一所懸命努力する姿勢を表現してくれています。特に自分に対して甘えることを許さない厳しさがあります。周囲からは一目置かれる存在です。

家族関係については字数の関係で割愛しますが、3枚の色塗りから言葉にならない心をダイレクト受取り共感し、コミュニケーションを取りながら子育て相談を行います。私共だけでは対応できないことは園や行政と連携してサポートしていきます。

次号は、園との連携サポート事業についてお話します。

■白と黒の解説

白は膨張して感じる色であり、近くに感じる色、軽さを感じる色です。また清らかさ、潔白、清潔、初々しさ、無、明るさ、スタート、病気の時も選びやすい色です。白は上記に加え新たな発信発散を意味することもあります。

黒は白の逆で、すべてを吸収してしまう色で反射する色がないことから黒となります。黒は後退、収縮、抑止、重さを感じる色です。また死、不安、深い悲しみやショックな出来事、逆に高級感、落ち着き、カッコよさを意味することもあります。

（参考資料）
野村順一著「色の不思議」
NPO法人 色彩心理診断士協会
COMPAS色彩心理診断士養成講座テキスト

1年間の ナイスショット特集

泥んこまみれだぞ〜！

手洗いゴシゴシ　風邪予防！

お魚いっぱい見たよ♪

大きいおいも掘れたよ！

水あそび楽しいね！

みんなで素敵な洋服づくり

ケンケンパ！どこまで行けるかな？

みんなで秋深し♪どんぐりの木までよーいドン！

種もみから育てたお米が採れたよ

園長先生バイバーーイ！

新聞の雨が降ってきた♪

落ち葉のおふとん、サイコー！

いい夢見れそうだよ。

しゃぼんだまとんだー♪

あ～あぁ～

あ～あぁ～

おいしいごちそうめしあがれ！

初めて馬に乗ったよ！

こんなにいっぱい掘れたよ

園庭の木から見える景色は最高！！

みんなで登頂　お～い！

田植えに挑戦！

静私幼だより
NO.179
2017.3.15

ナイスショット

見て見て
姫! ンゴと世界一って
こんなに大きさが違うんだよ!

牛さんどうぞ

春が来た

キャ〜! ソリ滑りって楽しいよ!

写真とって!

本番前ちょっとドキドキ

力もちだぞ! みてみてー!

皆で力を合わせてがんばるぞっ!

歌舞伎役者も顔負け!

大きくなったかな?

はっけよい　のこった!

【編集後記】　先日、80歳半ばを過ぎたやや認知症気味の父に年齢を問いてみましたところ、ニコリと笑いながら「歳は忘れたが、気持ちは30歳だ」と父はお茶目に答えました。思い起こせば短気で怖い父親でしたが、いつの間にか何を言っても笑って答える父になっていました。

年々、身体ばかりが丸くなるばかりで、実年齢に相応しい考えや振る舞いが出来ない私ですが、私も80歳過ぎたらいつの間にかこうなるのかな、父もだいぶ歳をとったなぁ…と思うと同時に「樹静かならんと欲すれど風やまず」という言葉が頭を過りました。

広報委員 / 焼津中央幼稚園　今村均

（表紙写真／こばと幼稚園）

発行人／千葉　一道
編集人／後藤　正章
広報委員会

発行所／(一社)静岡県私立幼稚園振興協会
〒420-0853
静岡市葵区追手町9番26号
静岡県私学会館内
TEL.054(254)6820・FAX.(255)3694

http://www.shizushiyou.or.jp
E mail: office@shizushiyou.or.jp

印刷／(株)三創　レイアウト・イラスト・村松麗子

このQRコードを携帯電話の「QRコードリーダー」で読み込めば、協会HPの携帯サイトにそのままアクセスできます。